

## 次回企画展予告

第15回企画展

朝鮮陶磁シリーズ-10

# 「高麗翡色青磁展」

会期：昭和62年4月21日(火)～8月30日(日)

会場：当館企画展示室

### ■「高麗翡色青磁展」

12世紀前半、高麗の都開城は、洗練された中国の北宋文化を採り入れ、王侯貴族を中心に“小中華”の文化の華を咲かせた。窯業も中国の影響の下で飛躍的な発展を遂げた。特に耀州窯・岳汝窯・定窯・景德鎮窯・龍泉窯などの磁窯から器形や文様の影響を濃厚に受けながら、独自の性格を形成した最盛期の青磁は、朝鮮半島の陶磁史の中でも最も美しい焼きものの一つに数えられている。

この灰味を帯びた緑青色の青磁は、ヒメイやカリセミの羽毛の緑色に近似しているところから当時の人々に“翡色”と呼ばれ珍重された。その評判は、北宋の都汴京にも伝わり、端溪の硯、洛陽の花(牡丹)、建州の茶などと共に天下第一のものと並び称され、中国の人々にも一白置かれていた。

翡色青磁は、沈静な素文のもの、毛彫りで流麗な文様を表わした陰刻、印花(型押し)、或いは印花に毛彫りを添えたもの、人物・動物等の形を写し取った彫刻、或いは透彫等々の装飾、造形がなされ、それらはいずれも繊細かつ優美な剪出気をもち、鑑賞する人の心を和ませ、魅了して止まぬ美しさを持っている。これらの作品は、朝鮮半島南西部の全羅南道康津郡大口面と全羅北道扶安郡保安面の窯業地を中心に焼造された。

同展では、翡色青磁の多彩に展開した器形、文様、技法の違った作品約50点と若十の陶片を展示し、中国陶磁との係わりを探ると同時に鑑賞に供する予定である。(K)



高麗瓶



高麗彫刻蓮花文三耳壺



高麗彫刻坐童形水滸

## お知らせ

第6回講演会を下記の如く開催致します。

日時：昭和62年3月7日(土)  
午後1時半～午後3時半  
(受付は午後1時より開始します。)

場所：中之島中央公会堂3階中集会室

講師：東京国立博物館 学芸部長  
長谷部 榮爾氏

演題：「中国の青磁鉄絵について」

※ 長谷部先生は、東京国立博物館の学芸部長として大変御多忙な方ですが、現在開催中の「高麗青磁の鉄絵と鉄彩」展に関連して、そのルーツともなった中国の青磁鉄絵について、是非お話をさせて頂くように御無理をお願いしました所、幸い御快諾を頂きました。多数の御来聴をお願いします。

※ 講演会終了後、美術館を見たいという御希望がかなりございますので、開始時刻を30分繰り上げ、1時半としました。お間違いのないよう御注意願います。尚、講演会の受付で会員証を提示していただきますので、会員証をお忘れなく御持参下さい。講演会当日に継続の申込みをされる方は、美術館受付でお申出下さい。

## 編集後記

昨年末、カレンダーについてのお問い合わせが多数ございました。一昨年は、友の会発足を記念して作製したもので、毎年作るようになっておりませんので、その点、御了承願います。ただし、来年分は、今年が当館開館5周年に当たりますので、それを記念して作る予定です。御期待下さい。(O)

1987年2月23日発行(年4回)Vol.24(通巻7号)

大阪市立東洋陶磁美術館



# 友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.7

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局  
発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

## 美術館の舞台裏(4)

今回は、展示ケースの設備のなかで、見すごされがら二、三の点について、ご紹介しましょう。まず展示ケースのガラス。当館の場合、ケースのガラスは、厚さ5ミリのガラスを一枚貼り合わせた「合わせガラス」を採用しています。強化ガラスがよく使われますが、これはある種の衝撃にはきわめて弱く、また効々になって破れてしまうこともあるので、作品の保全上はガエって問題があるからです。次にガラス戸の開閉の仕方。ガラス戸が固定式か、開閉式かは、作品を展示する場合の出し入れに大きく影響してきます。固定式の場合は、ケースのどこかに出入口があって、ケースの中に身をかがめながら人が入って、奥の方から順に物を置いていかなければなりません。陶磁器の展示の場合は、やはり、立ったまま、前方から出し入れできる方が、安全性、機能性の面ですぐれていると言えます。当館の場合は、ガラス戸が左右に開閉して、壁の中に納まるようになっています。前面左右開閉式の欠陥は、左右のガラス戸が引き違いになって二重に重なる箇所ができ、鑑賞の際のさまたげになることです。当館では、細い金属製の一本の縦棧に、二枚のガラス戸が納まってしまっているので、鑑賞上の問題は解決いたしました。第三に、展示ケースの中に貼る材質も重要です。展示台の表面には、陶磁器を置いた跡が丸くついていることがよくあります。当館では、摩擦に強い材質を探した結果、自動車の座席に使用する布地が適当であることが判りました。陶磁器を置いたり外したりしても、ほとんど跡形は残りません。その布地を、暖いラフダ色に特染めしてあります。また、ケースの壁面には、視覚的に柔らかな印象を与えるフラノ地を、同じ色合いに染めて貼りつめるなど、さまざまな工夫をこらしています。

次回からは、美術館の舞台裏、いよいよソフト面に入っていきたいと思います。

大阪市立東洋陶磁美術館  
館長 伊藤郁太郎

# 高麗青磁の 鉄絵と鉄彩展について

大阪市立東洋陶磁美術館

館長 伊藤郁太郎

昭和62年1月27日付、読売新聞・夕刊紙上に小文が掲載されましたが、読売新聞の御好意により、その転載が許可されましたので、ここに全文を収録し、作品解説を新たに書き加えて補うことといたしました。

「大阪市立東洋陶磁美術館は、開館して4年と2ヵ月、今秋11月に5周年を迎える。この間、年に3回ずつ、企画展を開催してきた。その内容は、中国陶磁と朝鮮陶磁が主なものである。とくに朝鮮陶磁については、一貫したシリーズとして展開しており、今回で第9回となる。技法別や器形別にテーマをしぼって、より専門的な理解を深めて頂くためのものである。この朝鮮陶磁シリーズは、館蔵品を中心に、他館や個人所蔵者からお借りして展開している。幸い朝鮮陶磁に関する限り、当館は、世界でも質量ともに第一級といわれる安宅コレクションが母胎になっているので、材料にはこと欠かない。

ところで、1月13日から開催している企画展「高麗青磁の鉄絵と鉄彩」について、その内容と見所を簡単に紹介しよう。

朝鮮半島で作られたやきもので、世界的に最もよく知られているのは、高麗時代(918-1392)に作られた青磁である。欧米の美術館でも、朝鮮美術工芸のある所、必ず高麗青磁は並べられている。その高麗青磁は、10世紀前半ごろに中国から技術が伝わり、その後もやはり中国の影響を受けながら発展していくが、やがて12世紀には、高麗独自の美感と性格を持つ青磁を作りあげた。

その中心をなすものは、翡色青磁と、象嵌青磁である。翡色青磁とは、ひびいのように美しい色をした青磁であり、象嵌青磁とは、白と黒の土を埋め込んだ文様装飾を持つ青磁である。これ以外にも、高麗青磁にはいろいろな種類がある。鉄絵青磁や鉄彩青磁もその一つで、主力の青磁とは趣を異にして、いずれも装飾の材料として鉄絵具を用いるところが共通している。鉄絵青磁は、青磁のくすりをかける前に、地肌

に鉄絵具で文様を描いたものである。筆による絵付け、とい

う点で、ていねいで精緻な文様からラフで大胆な文様まで、かなり幅広い自由な表現が可能となっている。宴卓文梅瓶(挿図3)のように、器形にマッチしたのびやかで骨太な文様には、現代にも通用する新鮮なデザイン感覚がうかがわれる。酒を入れた容器であるが、このような絵付けの面白さが、鉄絵青磁の大きな見所と言えるだろう。35件の出品。

一方、鉄彩青磁の方は、地肌を鉄絵具で塗りつめてから、青磁のくすりをかけて焼きあげたもので、黒く見えるが、黒くすりをかけたものではない。白い土を象嵌して、人參葉や雲鶴、柳などを表したものが多く、精緻というより素朴な文様である。黒一色のしびい色に白い文様の素朴さが加わって、いかにも日本人好みのする味わい深いやきもので、戦前から評価が高い。さわめて数の少ないものだが、今回は17点もの作例が一堂に並んで、話題を呼んでいる。両種ともに、今まで全く知られなかった全羅南道海南郡の窯でも大量に焼かれていたことが、ごく最近になって分かってきた。鉄絵青磁と鉄彩青磁のほぼ全貌が、この企画展によって捉えられるのである。」

## 作品解説

### 1. 高麗青磁鉄絵 唐花唐草文梅瓶

この梅瓶は、高麗青磁鉄絵の中でも、比較的早い時期、11世紀末ごろの作例とと思われる。肩と胴裾に菊花弁状の装飾帯を廻し、それらに囲まれた胴の全面に、唐花唐草文を描きこんでいる。三つの花心

を持つ花は、菊の花にも似ているが、中国陶磁にしばしば現れるものである。とくに広州西村窯を中心とする中国南部の青磁鉄絵の文様にこれとそっくりなものが多く、数千キロ離れた高麗に、何らかの方法で伝わったものと考えられる。高麗では牡丹文とともに特に好まれたようで、この菊花唐草文を描いた作例は多く、今回の企画展にも8点、出品されている。同じ菊花唐草文でも、この梅瓶のそれには、形式化した硬さがなく、生き生きした線の中に、整った感じを備えており、早い時期のものだと判断される。青磁の



1. 青磁鉄絵唐花唐草文梅瓶

色も、やや黄褐色に近く、中国南部の青磁鉄絵の持つ色調と似たところがあるのも、それを裏づけているようである。名品とは言い難いが、作風の変遷を辿るには、格好の作例である。

### 2. 高麗青磁鉄彩

#### 詩銘入筒形瓶

青磁鉄彩という名称は、技法的な特徴を適確に言い表わしているとは思えないが、それが慣例になっているようなので今回の企画展でも使用した。しかし本来は、「青磁鉄地」とでも言った方が判りやすい。すなわち、鉄絵具を素地に塗りつめ、その上から青磁釉をかけて焼きあげたものである。白象嵌してある作例が多いが、多くの作例を通じて言えることは、一般の象嵌青磁の場合と象嵌のやり方が違うということである。一般には、生乾きのうちに文様の部分を彫りこみ、乾燥した彫り跡に白土や礬土を埋めこんで素焼きをする。しかし、鉄彩青磁の場合は、いったん素焼きをした素地に鉄絵具を塗りつめ、その使い素地を彫りこんでいくようである。従って、象嵌特有の細かい精緻な細工は不可能で、ぼきぼきと折れるような感じの象嵌になっていることが多い。この瓶は、鉄彩青磁の中でも、他に類がない器形と文様を持っている。詩は「酒為温無毒 茶因冷不香」と読める。他面の詩は「此酒不可不飲 佳人才子利逢」であり、酒器として用いられたことが明らかである。高台底がくり上っており、四つの孔があるのは、ひもを通して吊るすようにしたものであろう。鉄彩青磁の中でも珍品であり、しかも静かな趣きを持つ優品である。



2. 青磁鉄彩象嵌詩銘入筒形瓶



3. 青磁鉄絵宴卓文梅瓶



4. 青磁鉄彩象嵌唐草文梅瓶